北見今昔

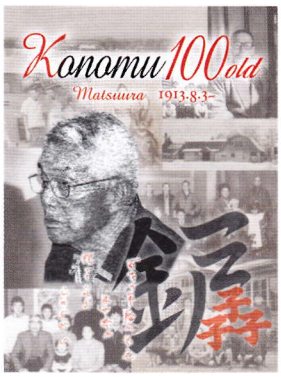
「北見と松浦家」

東京北見会 会長
井戸 理恵子

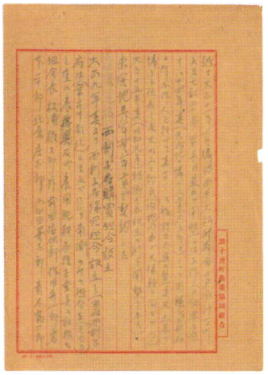
本会報の編集・制作・印刷を担当していただいている株式会社ローヤル企画の会長・松浦豊氏のお父様、松浦このむ氏が2013年8月3日に100歳を迎えられました。

このむ氏は1913年、父・権三郎氏と母・ハルエ氏(以降、敬称略)の間、北海道常呂郡野付牛村(現在の北見市)に生を受けられました。

松浦家は山形県を出自としておりましたが、03年に権三郎の兄・吉三郎が野付牛村に移住したのを機に、翌年祖父・権七が移住。続いて05年に祖母・ヒデと権三郎の二人も権七のもとへ向かいました。これが北見の地での、松浦家の始まりです。



▲親族一同の協力で制作した『松浦このむ 100歳記念本』



▲明治以降の北見を知ることのできる貴重な資料

当時、この地は既にハッカの産地として世界的に有名でしたが、07年、西富に5頭の牛が収容され酪農業が始まったのを機に、松浦家でもこれを生業としたといいます。新たな地でこうした新しい技能を取り入れ、懸命に働く両親・家族のもとにこのむは成長していきました。

松浦家には、入植当時の様子をうかがえる貴重な資料が残されています。そこには「熊の寝起き跡を初めて目撃したことが忘れられない」や「野宿同様で一晩過ごした」などの記述が見られ、新しい土地で生活をする人々の戸惑いや困難を知ることができます。しかし、そうした状況も家族全員で助け合いながら乗り越え、北見の地にしっかりと根を張っていったのです。

成人したこのむは、トシと結婚、5人の子宝にも恵まれ、両親に代わって一家の大黒柱にもなりました。さらに45歳の頃には、農業研修生として秋田県から橋本満を受け入れますが、このむはこの時のことを「まるで家族が増えたようだ」ととても喜んだそうです。子どもたちと兄弟同然に暮らした満は、仕事熱心で真面目な頼りになる存在。独立後も訓子府町内に住み続け、今も昔も松浦家にとってなくてはならない人となりました。

やがて、子どもたちもそれぞれ立派に成長。なかでも次男の豊は、75年、手動写植機による写植会社として株式会社ローヤル企画を設立し、81年には業界に先駆けて電算写植機を導入するなど関東で成功を収めました。その後、91年には北見事業所を開設するに至り、故郷に錦を飾る程となりました。

子どもたちが独立した後も、このむの活力は衰えず、63歳の時には酪農から玉ねぎ中心の農業へと転換。今日に至るまで北見の玉ねぎ生産量日本一を支えています。

▲現存するサイロと牛舎。1966年秋に一人で完成させた

また、このむ・トシ夫妻は仕事以外にもさまざまな活躍を見せました。例えば、64年に発足した清住親睦会もその一つで、二人はメンバーたちとの会合や催し、全国各地への旅行を楽しみました。8年間会長職を勤めたこのむに、会は97年その功績を讃える感謝状を贈っています。一方トシも、清住婦人部として訓子府夏祭りの千人踊りに参加するなど、夫婦揃って地域のために積極的に活動していきました。まさに、北見開墾の歴史とともに歩んできた人生といえるのではないでしょうか。

101歳になった今もなお、足腰がしっかりし、元気いっぱいのこのむは、天気のよい日には外へ出て庭掃除や植木の手入れを行っています。「健やかでいられる自身の身体」と「家族」への感謝を常に心に温めながら、日々楽しく穏やかに過ごしているのです。まさに人生の手本となるあり方ではないかと思わずにはいられません。

▲現在のこのむ氏。天気のよい日には庭木の手入れも